

ラッキー! 構造人生

構造設計者・岡部喜裕

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■坪井善勝先生とともに

「表題から施工者について語るのかと思いました」と、開口一番おっしゃったのは、力体工房を主宰する構造設計者の岡部喜裕さんだ。筆者の本業が建設会社なので応援の意味を込めて「施工者に幸あれ」と覇志堂がネーミングしたことをお話しする。さて、この「覇志堂」だが「誰?」といわれることも多いのでこの機会に説明する。建築技術代表取締役の橋戸幹彦がその人なのはお察しのとおり。祖父の代に岐阜県神岡町(現飛騨市)で和菓子屋を営んでおり、その屋号が「覇志堂」。登場するときはその名で…という訳です。

岡部さんは群馬県伊勢崎の出身で、前橋高校から日本大学理工学部に進んだ。4年生になってゼミを探す。斎藤公男さん(本コラム第61回)が高校の先輩とわかりお願いした。ところが斎藤研究室は大人気だったという。入り込む余地は少なかったが、なんとか潜り込む。今も昔も面倒見のよい斎藤先生が坪井研究室を紹介してくれたおかげで、研究科建築学専攻を修了できたのは「ラッキー!」なのでした。

1977年には、建築工学会坪井善勝研究室に入社して、1979年に株式会社となった坪井善勝研究室に引き続き勤務し、1990年に独立するまで13年間の長きに渡り坪井先生との縁は続いた。「坪井先生に計算の具体的な仕方を教わったことはないが、物の考え方は教わりました」。

その時代の大構造家がやはり大物だというお話しは、オフレコも多いけれどその触りだけお許し願おう。夕方5時くらいになると事務所の下にハイヤーを呼んで、そ

れから10時くらいまでウイスキーを片手に構造談義。話し相手には近くに事務所があった構造家の青木繁先生を呼ぶこともあったという。大御所の構造談義を聞く贅沢な時間を過ごした岡部さんだった。「仕事がないときは沢山の蔵書を自由に見られた」。東京国際カルカレッジや東京理科大学で長年講師を務めたときに生きたに違いない。まさにラッキーな構造の修業時代でした。

■カリヨン塔

坪井研究室では、神慈秀明会の神苑教祖殿と研修棟(設計:ミノル・ヤマサキ)、カリヨン塔(設計:I・M・ペイ)の構造設計に参画した。塔はRC造+SRC造+S造で、先端のS造は中空で船舶と同じようにつくられた。階段は壁に沿ってらせん状に登って行く。岡部さんにとっては一番思い出に残っている仕事。

MIHO美術館(設計:I・M・ペイ)や長岡文化創造フォーラム、ヴァレオユニシアトランスミッション厚木工場(設計:岡部憲明アーキテクチャーネットワーク)など、これまで携わってきた仕事の話は尽きない。

■楽しい設計目指す

「構造設計者は計算に溺れず、実際の建物を想像して欲しい。これからの構造設計者も先人がやってきたような実験や経験値から知見して検討して欲しいのです」。壊れる様子を想像せずに計算=設計のような雰囲気現代に苦言を呈する。「確かにいいときに仕事をしてきましたね」と覇志堂。マニュアルをみることしかしない世代に疑問をもつ二人です。

“群馬県人熱しやすく冷めやすい?”らしく、一時期は自転車に凝っていたという。1時間くらい平気で通勤もしていたし、今も3台の自転車を乗り回す。最近ではXaphoon(ザフーン)という楽器に挑戦中だという。ボケ防止のためにというが、苦手な音楽を克服しようと岡部さんは、それを実践する。「知らない世界を見るのがいいのかな」、坪井先生が教えた全体を見るという物の考え方が生きているのかもしれない。「短期間でも、つくる喜びを感じられ、愉しく、設計や施工ができるとういのですが」今も若々しい現役の構造設計者だ。

